

書 評

J. H. Warfel 著, 矢谷 令子・小川恵子訳

「図説 筋の機能解剖 (改訂第2版)」

帝京大学教授 岩 倉 博 光

四肢や体幹の運動のありさまを眺める時、どの筋がどのように活動しているのか概念として考えるのはそれほど難儀ではなくなっている。日々接する運動障害のそれぞれについて、ある程度まで筋肉の評価のために役立つ基礎的なことを述べた書物が数多く見られるようになったこともその理由のひとつであろう。ことに筋の形とか、起始と停止の位置を明らかにして、筋のはたらきを教えようとする目的で書かれたものがいくつか著されたことが大きい。ここに述べようとする「図説、筋の機能解剖」もそのひとつで、四肢と体幹の個々の筋が線画によって明確にかかっている。そこには筋の起始と停止、支配神経と血管が描写され、電気刺激に反応する運動点も書き込まれている。

「図説、筋の機能解剖」は Quiring と Warfel 両氏による筋肉の図説解剖書「The Extremities」と「The Hand, Neck and Trunk」の両書を訳出されたものであるが、この初版は多数の読者に好評を博した。

線画による表現や簡潔な記述だけではもちろん十分な説明に不可能である。したがって読者の便になるよう、各図には Gray の解剖書と Grant のアトラスを参考にするようにとく参照>が加えられている。

この書を眺めていると、いくつかの興味あることを見出す。たとえば、肩関節の外転あるいは屈曲時に大円筋と小円筋は筋電図上で互いに似た動きをパターンに示すが、140度前後で最大となることの意味とか、足の運動において後脛骨筋と短

腓骨筋、前脛骨筋と長腓骨筋の拮抗バランスの存在など、基本に戻って考えることが役立つと教えてくれる。しかし一方、前腕の表在性筋群と深在性筋群との位置的関係や、神経圧迫症候群の局在性を確かめようとすると、別の解剖学書をしらべなければならぬであろう。

そこで考えたことであるが、日頃からノート代りに利用でき、必要とあればそこに自分でメモや図表を書き入れることのできるようなものがあれば、学習や実習に便利ではあるまいか。

矢谷、小川両氏訳になる「図説、筋の機能解剖」(改訂版)は日常使用するテキストブックとして価値あるすぐれたものと考ええる。

(B 5 頁 263 図 220 写真 1
¥ 3,800 〒 240 1978)

—医学書院刊—